

Title	三島由紀夫作品論 : 太陽と暗闇
Author(s)	崔, 殷景
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45720
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	崔 殷 景
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19127 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	三島由紀夫作品論— ^{ひかり} 太陽と ^{かげ} 暗闇
論文審査委員	(主査) 教授 内藤 高 (副査) 教授 出原 隆俊 同志社大学文学部教授 佐伯 順子

論文内容の要旨

本論文は、三島由紀夫の文学において〈肉体〉や〈男性美〉についての意識が顕著になる昭和 30 年以降の幾つかの作品について、女性の登場人物たちに特に焦点を当てて分析した論文である。もっぱら〈男性〉という観点から論じられ、陰画的役割を果たすものとしてしか論じられてこなかった女性人物たちについて詳細に検討することにより、三島の文学における女性の持つ積極的意味を明らかにしようとする試みである。全体として、序章、第一部「『豊饒の海』の「女」たち」、第二部「演じる「女」と「男」」、第三部「「母」あるいは「女」にまつわる物語」、終章の三部を中心に構成されている、400 字換算で約 520 枚の論文である。具体的には、第一部では『豊饒の海』四巻が、第二部では『サド侯爵夫人』と『わが友ヒットラー』が、第三部では『沈める滝』と『音楽』が主な分析の対象となる。

第一部、『豊饒の海』の分析では、清頭たちの転生を導き最後にはそのすべてをも否定する存在としての聡子の重要な役割の分析はいうまでもなく、作中の男たちが視線を向けることのない「端役」たちにも十分な注意がむけられている。『春の雪』で女中蓼科の果たす役割、『奔馬』におけるみねと楨子、みねと本多の妻梨枝との対比、さらに『天人五衰』における絹江などに焦点が当てられる。

第二部では、まず『サド侯爵夫人』が、不在のサドから逆に照射される女性の差異を示す戯曲であることが強調された後、とくに「貞淑」という女性に課される枠を超えて修道院に入るルネの意味について考察がなされ、『豊饒の海』の聡子との共通点なども示唆されている。こうした姿勢は、「男」という性に最後までこだわらざるをえなかった『わが友ヒットラー』のレームと顕著な対応をなすことがさらに指摘される。第三部では、『沈める滝』や『音楽』に見られる不感症や冷感症の女性を求める男性達について論じられ、そこに、〈母〉、〈永遠の女性〉を求めようとする男達の志向の存在が明らかにされる。こうした分析を通して、全体として、三島の文学の男性達の背後に存在する〈女性〉の意味の持つ重要性が指摘されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、まだまだあまりまとまった形で論じられることの少ない三島文学の女性の登場人物について、多角的な角度

から読みを試みた貴重な価値のある論文といえる。一般にテキストの読みは非常に丁寧で正確であり、説得力のある論を展開していく能力も十分に窺える。論述も正確な日本語で適切に書かれており、ほとんど誤りも見られない。また『豊饒の海』のテキストが展開する展開の上での女中蓼科の果たす重要な役割への注意、『サド侯爵夫人』のルネと『豊饒の海』の聡子との照応、『サド侯爵夫人』と『わが友ヒットラー』を対比して読むことによる両作品の意味の鮮明化など、多くの創見を含んでいる優れた論文といえる。

とはいえ本論文に問題がないわけではない。申請者は三島の作品の男女の問題を分析するために、男性原理—女性原理などの分析用語を用いている。三島もこうした用語を使うことがあるが、こうした語には多分に曖昧さが伴う。とりわけジェンダーという概念が積極的に採り入れられるようになった今日においては、さらにこうした分析概念に注意する必要がある。また、それぞれ違う立場にある研究者の先行研究が、ひとまとめに括られて同じ結論を導くために、利用されているところもある。また女性主人公達の重要性を強調するあまり、それまで異なる次元で論じられてきた主人公達の意味を、結論部でひとまとめに括りすぎたところがある。こうした点にはより細心な注意が必要となろう。

こうした問題点、改良点はあるものの、それは三島文学を新鮮な観点から丁寧に読み、説得力のある言葉で論を展開した本論文全体の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。